

## 153 なかせんどう 中山道



指 定 市 史 跡 昭和61年 9 月10日  
所在地 布施・望月・茂田井  
所有者 佐 久 市

中山道が制定されたのは慶長7年（1602）、2年後の慶長9年（1604）に徳川家康は大久保長安を総奉行として、諸大名に命じ沿道の大改修をさせ、1里を36町とし1里毎に道の左右に方5間の一里塚を築かせている。望月に残る中山道は、望月地区瓜生坂に100m程原形で残されている他は、拡幅されたり水路の流れを変更したり、舗装したり、あるいは断ち切ったりされている。

瓜生坂近くのケヤキの大木の下に享保2年（1717）の観音像と元文元年（1736）の供養塔がある。安藤広重の「木曾街道六十九次」の望月宿もこのあたりを描いたものだという。瓜生坂を越え、鹿曲川を渡れば、川沿いの宿望月である。旧望月宿本陣大森家に残された「家系代々旧記」によれば慶長5年（1600）、家康の中山道開設の命令で、処々に散在していた民家を集めて宿場の形態をつくり、大森家は庄屋、本陣、問屋の三役を兼ねたとある。本陣附近の脇本陣鷹野家、重文真山家住宅、そのほかの家並みは、出桁造りの家、軒を連ねる京風の格子等に中山道望月宿の名残りを偲ぶことができる。文化元年（1804）につくられた宿割図によれば、当時望月宿の家数は旅籠屋29軒、大泊りの時の下宿が50軒、百姓家や商売屋で下宿を兼ねたのが39軒、貸家が12軒、これに本陣、脇本陣を加えた総家数は132軒であった。寛保2年（1742）の大洪水で鹿曲川右岸にあった望月新町50戸は、ことごとく流失して左岸の現在、千曲バス営業所のある附近に移り、それまで5町余だった家並みが6町余となった。